

JOURNAL



Contents

- 既上掲載レポート…仕事も家事も楽しみたい～息内しいバランスを抄～
- 本誌紹介…モノモノババのつくし方講座
呉のみぞづくし体験セミナー
- 2012年度センター事業計画
- 本誌紹介…知ってほしいですか？チートDV
- 相談室だよ！…チートDV防止に向けて
- 男女平等政策課からのお知らせ…お悩みのSOSにお答えします
- キラリ☆かがやく人Interview
<http://www.city.kurume.fukuoka.jp>

2012
vol.40

キラリ☆かがやく人 interview

西村 利枝 さん

ココチカフェ店主、23歳から独立開業し、BARやアロマ&リフレクソロジーサロン、居酒屋等を営業した長女(姉)長男(弟)の2児のママ



●なぜ居酒屋をしようと思ったのですか？

18歳で会社員として一人暮らしを始めた時に行きつけのお店ができて、飲食店に興味を持ちました。小学生の頃から読書と「一冊一冊の主」という言葉に憧れていたこともあり、「みんなが集まる居酒屋をつくりたい」と23歳で開業するという目標を立てました。はじめはビルの6階という好条件とはいえない場所でBARを開業しましたが、だんだんと常連のお客が増え、翌年には2店舗目の居酒屋、さらに26歳のときに3店舗目のワンコインバーを出店しました。

●経営者としてどんな思いが湧きましたか？

やりたいことがたくさんあり、4～5時間睡眠をとる以外はすべて仕事という生活を送っていました。お客様から支持を得ていたワンコインバーが火災で全焼したとき「落ち込んでられない」と強気で聞きました。仕事は自己実現の一つであり、自分の存在価値を実現できるものだったので諦めたいとは思いませんでしたが、長女を妊娠して仕事と育児との両立ができるか不安になりました。店をスタッフに任せて、育児と向き合い妊娠以上に大変な思いをしていたときは、同世代の男性オーナーが経営を拡大したとの情報をきいて、くやし泣きしたのを覚えています。

●母さんが手伝ったことは？

「100点満点のお母さんにならうと頑張らないでほしいです。小さいお子さんを育てているお母さんたちに、「仕事も家事も育児もできていてすごい」と言われることがありますが、私もすべてを完全にできていくわけではないのです。私の生き方をみて励みになってもらえればが幸ですが、「自分にはできない」とプレッシャーになる存在ではたくありません。女性は専業主婦→出産等でライフスタイルが大きく変わることが多いです。今の私は子どもたちの生活を第一に考えて、わが子にも食べさせたいメニューを考え、居酒屋のココチカフェをオープンさせました。これから子どもたちが大人になったら、また夜間営業のお店をオープンするかもしれないし、年をとったら自分や孫の居酒屋があって誰かがらっと寄ってくるようなお店をつくるかもしれません。それぞれのタイミングで自分にとって大切なことを選択しながら生活や働き方を変化させていくことができたらいいですね。

久留米市でいきいきと自分らしい生き方をしている方をご紹介します。

小坪 喜代子 さん

女性農村アドバイザー、後の久留米市副市長、人権擁護委員、くるめフォーラム実行委員、男女平等推進センター運営委員



●農家の女性農村アドバイザーになったきっかけは？

25歳のとき農家の長男と結婚したのを機に、専業主婦の仕事を探して北野町で農業に轉りました。当時は、「嫁は家業と家事をしないといけない」という社会の固定観念があったので、家と田んぼを往復する生活をしていました。そんなある日「女性農村アドバイザー」を勧められ、夫の後押しもあってアドバイザーになることにしました。その中でいろいろな集まりに行き学習したりすればいいし、先方と出逢ったり、農業と家事だけでは味われない楽しさを感じました。

●多忙を極める小坪さん、そのハイワンの秘訣は？

アドバイザーやくるめフォーラム実行委員等になり、人と人との出会い、つながり、人の輪が広がっていくことが楽しいですね。もともと世間好きな性格ですし、活動をおしてさらに人のために何かしたいという気持ちが出てきます。人に何かするとまた何か返してもらえて、それが自分の力になっているのかもしれない。

●男女共同参画との出会いは何ですか？

女性農村アドバイザーをめざす中で「そもそもアドバイザーの目的は？」と聞いてみたら「農村における男女共同参画」だったので、「男女共同参画」と言われてもピンとこなかったのですが、平成17年の市町村合併をきっかけに久留米女性連帯推進事業くるめフォーラムに轉るようになり、先方への話を聞いた後、男女平等推進センターの講座で学習したりしました。農業分野では性別役割分業が根深いので、一緒に農業をしている三女が後継者となるときには女性ももっといきいきと農業にかかわり、周回から認められるように男女共同参画社会の実現に努めたいです。

●皆さんに伝えたいメッセージはありますか？

仕事も家事もしているいろいろな役割をひきうけている自分の姿を見て、ある女性から「小坪さんを見て時間って作れるものなんだと思った」と言われたことがありました。私は家業の継承もあり、周りの人や環境にも恵まれていて時間を作られると思いますが、「忙しい」と家事や育児、仕事に追われるだけでなく、何とかして自分のプラスになる自分のための時間を作ってほしいですね。そして、若い人には将来のことを心配ばかりせずに、自分たちの子どもや自分たちが年をとったときに、女性も男性もみんなが生きやすい社会になるような広い視野で考えてほしいです。



編集・発行 平成24年3月

久留米市男女平等推進センター

〒830-0037 久留米市御園町1830-6 久留米市男女平等推進センター

TEL 0842-30-7800 FAX 0842-30-7811

URL <http://www.city.kurume.fukuoka.jp> E-mail denp-c@city.kurume.fukuoka.jp

妻に子どもに モテモテパパのつくり方講座

2月26日 講師 富岡 礼吾 (ファザーリング・ジャパン九州支部)

子育て中の男性やカップルを対象に、日頃の生活を振り返りながら、ワーク・ライフ・バランスや子育て等について考える講座を実施しました。



富岡さんは、シングルパパとして子育てや家事に向き合った自らの経験を話されました。「子育てするなら楽しくやろう」をモットーに、今ではキャラクター弁当やミシンで絵本バッグを作ったりする富岡さんですが、仕事一筋の生活から子育て中心の生活に転じた当初は、シングルパパであることを恥ずかしくて誰にも言いだせずにいたそうです。学校のPTA役員に推薦された時にそのことを打ち明けたことで、夕食を差し入れてもらったり、ゼッケンを譲ってもらったりと周りから助けってもらったと話されました。



「子どもと親密に接することができる時間は10数年の短い時間なので、子どもとの時間を大切にしたい」との話のあと、モテモテパパの10ヶ条を紹介。家族を大切にしているパパが一番との話で締めくくりました。

講義後に行われた「絵本ライブ」では、富岡さんの語り口に子どもも大人も絵本の世界に引き込まれていました。受講者からは「自分ももっと家事、育児に関わっていかうと意識を変えるきっかけになりました」、「パパになる自覚が更に強まり、今後の育児に活かそうと思いました」等の声が寄せられました。

オヤジの味を食卓に～男のみそづくり体験セミナー

1月29日 講師 井上 慶子 (株式会社)

男性を対象に、ワーク・ライフ・バランスと食事の大切さを考えるみそづくり体験セミナーを実施しました。

みんなで協力して、煮た大豆をすり鉢でつぶし、麹を混ぜ合わせてみそを作りました。また、熱湯で完成したみそを使い、豚汁を作って試食。手作りのみそのおいしさに、みなさん驚いたようでした。

その後、「男性も家事や育児を一緒にすることで、夫婦のコミュニケーションもぐっと、良い関係を築ける」等

の話をし、男性の家事や育児について意見を交わしました。

参加者からは「自分のみそづくりができるかと聞いていたが、うまくできた」、「みそを自分で作り、家族を喜ばせたい」等の声がありました。

今回仕込んだみそを使って料理をし、家族を笑顔にしたいものです。



仕事も家事も楽しみたい！～私らしいバランスとは～

講師 IKEA 調剤師
ミカエラ・ウエムラ (顧客担当マネージャー)、遊助 伸也 (人事マネージャー)
並 美花 (広報担当)



「家が世界で一番大切な場所、子供が一番大切な存在」と考え、ワーク・ライフ・バランスを推奨しているスウェーデンのホームファニッシングストアIKEA(以下「イケア」という)。イケアの働き方から自分らしく生きるヒントを探りました。

このレポートは2月4日に発行された週刊誌の一部をセンターで要約したものです。

企業理念と社員の多様性

イケアの企業理念は、「より快適な毎日をより多くの方々に」とあり、人事面においても「仕事のプロとして、まだ人間として成長する機会を提供すること」、「チームで協力してお客と共に自分たちもより快適な毎日を送ること」を理念としている。また社員の多様性(ダイバーシティ)もそのひとつで、社員の年齢層が幅広く、男女、国籍で差別をすることはない。

スウェーデン人のミカエラ・ウエムラさんから見た日本社会

私は日本でもワーク・ライフ・バランスのとれた働き方をしており、いい仲間もたくさんいるので、ここで働くことが自分自身の成長につながっている。スウェーデンは、家や家族との生活を大切にしている。また、会社は休暇取得を推奨していて、5週間の有給休暇はすべて消化している。家族と過ごす時間は、私にとっての活力の源になっている。スウェーデンでは「女性が結婚して働き続けること」はごく当たり前のことで、パートナーもキャリア・アップを後押ししてくれる。だから、スウェーデンでは「お母さんになりたい」という言葉はなく、女性が仕事か家庭かを選択するような日本の考え方を知ったときには驚いた。また、出産後の職場復帰が難しいのは、日本社会では、保育園に入りづらく保育料が高い等、女性が働き続けるための条件や環境が整えにくいのだと思う。社会全体でこれを変えていこうという動きがなければ、状況を変えていくのは難しい。子育てはその時しかできない貴重な経験であるため、法律で男性の育児休業が規定されているのであれば、それをより活用して積極的に育児休業を取得しやすい環境を整えたいと思う。

制度面におけるワーク・ライフ・バランス

長時間働かなくても結果を出す取り組みを行っていて、何事もシンプルに考え、仕事の質を高める努力をしている。また、女性の産前産後休暇は当然ながら男性にも15日間の出産した配偶者や家族のケアをするための特別休暇がある。その間は他の部署からの異動による応援体制がとられるので、チームとして業務に支障がないよう情報などを共有し工夫している。また、育児休業や休暇取得は昇進や人事評価にも影響せず、同職または同レベルの仕事に復帰できる。子どもが3才になるまで短縮労働が可能で、企業内託児所(KEA託児)は生後57日目から利用できる。

これらの制度の活用により、企業の業績も上げながらスタッフとも良好な関係を保つことができている。これからも人々の集まる最小単位である家族のあり方、関わり方、過ごし方について、まじめに向き合っていきたい。

